



# たんぽぽ会 (南城市つきしろ自治会)

住所 南城市佐敷字佐敷1678-202

TEL 098-948-3829

カテゴリ 健康・福祉

## 地域の高齢者を招き、手作り料理でもてなす交流会を開催

平均年齢70代、22名のメンバーで構成される(2021年12月現在)つきしろ区の健康づくりボランティアサークル“たんぽぽ会”。いつまでも健康で安心して暮らせる地域づくりを目指し、県社会福祉協議会が推進する“ゆいまーる拠点カフェ”に申請。これまでの実績が認められ、活動費100万円の補助金交付が無事に決定。2017年から活動を開始した。

会の拠点である“友愛の里つきしろ”で行われた開所式では、志喜屋会長が「自治会をはじめ多くの事業所の協力を得て、みんなが集い語り支え合えるカフェ事業に取り組んでいく。」と挨拶。自治会の役員も加わった会のメンバーが、地域の高齢者を招いて手作り料理でもてなすという交流会の取り組みがスタートした。

週1回の開催で、毎回20名程が参加。交流会の他にも、地域の環境美化に取り組むことで身体を動かしたり、社協から講師を招いて認知症予防の勉強会も行っている。

活動の中で会話も弾み、それぞれの状況も分かるようになってきたため、日常生活の中でもお互い声を掛け合う等、地域コミュニティの活性化にも繋がっているようだ。

そのため、補助金の交付が終了した後も、地域の企業等からの支援を得て活動を継続しているという。(現在はコロナ禍の影響を鑑み休止しているが、再開を求める声も多くあるため、状況をみながら調整中とのこと。)

「今後も課外活動に積極的に取り組み、高齢者の外出支援等をサポートし、さらなる住民同士の関わりや高齢者の健康支援を目指したい。」2010年からつきしろ自治会長を務め、会の活動にも参加している新城さんは語ってくれた。



# 名護市大浦区

住所 名護市字大浦160 TEL 0980-55-8606

カテゴリ 観光・地域交流 / 地域の魅力発見

## 地域活性化の拠点として、コミュニティセンターの建設を計画!

自主財源の確保や担い手・住宅不足など、区の課題について住民みんなで話し合うワークショップを2019年から2年間で10回ほど開催している。その中で、住民が自発的に“経済チーム”と“暮らしチーム”を結成。経済チームは、空いた土地を活用しバナナや野菜を栽培。区内にある“わんさか大浦パーク”の直売所で販売を始め、少しではあるが収入を得ている。暮らしチームは、地域の高齢者の孤立防止や防災、子供育成等について、若者を中心に議論を重ねているようだ。

地域の文化や自然、防災、子育て、そして前述した課題解決のための拠点として、老朽化している集落センターを次世代型コミュニティセンター(2階建て)として再建させる計画が進行中であり、ワークショップを元に区主体で基本構想計画作成し行政へ要請も行った。災害時の避難所を想定している2階フロアは、平常時に宿泊施設として運営ができれば収益にもつながる。イベントや日々の活動により、地域のさらなる活性化も期待され住民が待ち

望む再建計画だが、大きなお金も動くため、すぐに着工とはいかない。現在は名護市議会での継続審査という形でやりとりが詰めの段階に入っているそう。

移住定住の先進地である東村への視察も行った。移住者からのニーズや住宅の間取り等学ぶべき点は多く、大浦区での移住定住者向け住宅の建設に向けて、方向性を固めることができたようだ。

ただ、「コミュニティセンターや住宅等を建てるのがゴールではない。住民1人1人が楽しいと思えることに共に取り組み、持続していける地域にしなければならない。」と宮里区長は話す。“住み続けたい、帰ってきたい大浦”というスローガンの実現に向け、地域が一つとなりチャレンジを続けている。



# 白保魚湧く海保全協議会

TEL 090-6863-1717

カテゴリ 環境保全

## 白保サンゴ礁を守るための集落一丸となった取組み

白保の海とその周辺の自然環境・生活環境の保全・再生と、サンゴ礁資源の持続的な利用による地域振興の両立を図ることを目標に、2005年「白保魚湧く海保全協議会」が設立された。

白保サンゴ礁海域の利用に関する自主ルールの制定や、伝統的漁具「海垣」の復元・活用、白保サンゴ礁での赤土堆積量調査。毎回20～30名ほどが集まる月1回のビーチクリーン活動、先人からの教を子どもたちに繋いでいくための出前授業・自然体験等、様々な活動を行っている。

子どもたちには、「電気のムダ使いはやめよう。」「ゴミのポイ捨てはダメだよ。」等、日常の場面に即して分かりやすく伝えるよう心掛けています。近頃では、SDGsの考え方がメディアでも取り上げられているため、子どもたちの環境への意識は高く、飲み込みも早いと感じるそうだ。

そして、環境保全＝手つかずではなく、活用するからこそ守られる。という考えの元、観光の推進にも取り組んでいる。以前は特に規制もなく自由であったが、前述した自主ルールは観光客向けにも定められており、海や集落内での注意点を守ってもらうことで、環境への負荷は減ってきているそう。

協議会には、漁業者やシュノーケリングを中心とする観光業者が関わっており、みんなで考えながら取り組んでいるという。「トップとは言葉だけで、実際リーダーは1番下から支える存在だと思う。」と代表の新里さんは言う。今後も、大切な海を守り地域の持続的な発展に寄与するため、集落をあげた活動は続いていく。



## 特定非営利活動法人 Okinawa Hands-On NPO

住所 沖縄市宮里3-17-25 (2F) TEL 098-936-6868

カテゴリ 子どもの健全育成／地産地消・食育／観光・地域交流／人材育成

受賞歴 平成29年度 沖縄県地域振興協会 地域活性化助成事業 特別賞

## うさがみそ〜れ〜!子ども菜園野外レストランでSDGsを学びながら地域と交流。

コロナ禍で行動が規制される中であっても、人や地域とのつながりを大切にしようと、雑草の生い茂った放棄地を活用し、菜園が作られた。地域のボランティアのサポートを得ながら、子どもたちが水やりに訪れ、無農薬の野菜を育てているという。

そこでの野菜を収穫し、地域の人たちと一緒に調理して食べるという「子ども菜園野外レストラン」と題された取り組みが、子どもたちにSDGsを考えてもらうためのきっかけになればと開催された。

地域の人々やボランティア、子どもたち50名ほどが集まり、シンメナービ(沖縄伝統の大型の丸底鍋)でカンダパー(葉かずら)ジュシーやウンチエパー(空心菜)のにんにく炒め等を作り、「うさがみそ〜れ(お召し上がりください)」と、しまくとぅばで声を掛けながら配膳した。

参加した子どもたちからは、「地域の方の助言のおかげ

で美味しいご飯ができた。」といった喜びの声や、「自分たちもSDGsに取り組める一人だと分かった。友達にも伝えていきたい。」という前向きな声、「もっと色々なことを話せるようになって、昔のことを教えてもらいたい。」と、交流の深まりを期待する声もあった。家に帰ってからも、食品ロスの削減等、学んだ内容を意識して取り組む姿も見られたとのこと。

イベントを担当した具志堅さんは、今後も、子どもたちが生まれ育った地域に関心を持ち、異世代交流の懸け橋ともなれるよう、民生委員と共に活動を継続していく予定だという。「子どもたちの成長に合わせて、学びのプログラムも開発できたら。」との意気込みを語ってくれた。

